福井貞助編

伊勢物語
―諸相と新見―

風間書房

編者略歴

福井　貞助（ふくい・ていすけ）

大正十四年新潟県生れ。
昭和二十三年東京大学文学部国文学科卒業。
弘前大学人文学部教授、静岡大学人文学部教授、東京家政学院大学人文学部教授を歴任した。現在静岡大学名誉教授。
伊勢物語に関する主論著『伊勢物語生成論』（有精堂、「増補版」パルトス社）、『歌物語の研究』（風間書房）。伊勢物語本文『伊勢物語に就きての研究補遺篇』中「校本補遺篇」（有精堂）、『東海大学蔵桃園文庫影印叢書・伊勢物語』解題（東海大学出版会）。伊勢物語注釈『新編日本古典文学全集・伊勢物語』（小学館）。

平成7年5月20日　印刷
平成7年5月28日　発行　（検印省略）

伊勢物語 —諸相と新見—

定価　一七、五一〇円
（本体　一七、〇〇〇円）

編者　福井貞助
発行者　風間務
印刷者　小峯光一

発行所
株式会社　風間書房
101 東京都千代田区神田神保町一の三四
電話〇三（三二二九一）五七二九番
振替〇〇一一〇—五—一八五三番

（有朋製本）
ISBN 4-7599-0944-3

目次

『源氏物語』から『伊勢物語』へ……秋山　虔……一
『伊勢物語』初段考……仁平　道明……一七
——物語のはじまりと唐代伝奇——
初段「女はらから」について……石田　穣二……三三
伊勢物語的なるもの……野口　元大……四九
『伊勢物語』の冒頭表現……片桐　洋一……六七
伊勢物語の構成と名称……森本　茂……八七
伊勢物語の日付記載章段と和歌……藤岡　忠美……一〇三
勢語散文と勢語和歌……神尾　暢子……一一七
「まめ男」の背景……今西祐一郎……一三一
——『伊勢物語』試論——
『伊勢物語』の十六段について……河地　修……一四五
——紀有常と和歌——
河内の国高安と大和の国葛城……雨海　博洋……一六三
——伊勢物語と大和物語——

伊勢物語六三段と漢文学……今井　源衛……一九
『伊勢物語』第六五段と第六九段をめぐって……菊地　靖彦……一九三
顕昭『古今集注』六四六番歌・注釈の意味するもの……市原　愿……二二五
伊勢物語の相補的解釈……田口　尚幸……二三九
——その序説としての試論——
伊勢物語と題詠……山本　登朗……二六九
——惟喬親王章段の世界——
伊勢物語と『古今和歌集』……松田　喜好……二九五
——八十七段を中心として——
定家本伊勢物語の表現形成……室伏　信助……三二三
——住吉行幸の章段をめぐって——
『伊勢物語』と『万葉集』……柳田　忠則……三三三
——物語形成の一面——
『伊勢物語』の原形と『古今集』業平歌の詞書……山田　清市……三五五
現存本伊勢物語生成序説……渡辺　泰宏……三七九
——その基幹部分の生成と作者の性格に関する試論——
狩使本伊勢物語の構成と増益をめぐって……林　美朗……四〇三
冷泉為和本伊勢物語について……中田　武司……四二三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鎌倉時代初期の作品における『伊勢物語』の享受……伊藤　颯夫……四四九
伊勢物語の特質と終焉段……福井　貞助……四六九
編者後記……四九一

『源氏物語』から『伊勢物語』へ

秋山　虔

好色人と生活者

『源氏物語』「帚木」巻の冒頭の「光源氏名のみことごとしう……」と起こされる語り手の口上は、やがて語り出されてくる空蟬や夕顔の物語を予告する文言といえるが、いまさらその言々句々をたどるにも及ぶまい。源氏は已れの不行跡が噂にのぼることを怖れ、世間に気がねして、いかにも堅気にふるまっていたのだから、交野少将のようなその道一筋の達人からすれば一笑に付されるといった体のものだろう、とまず述べられている。彼が左大臣の女葵の上を正室としたのは「桐壺」巻の十二歳の年のことだが、以後、内裏住みを好み、葵の上のもとには途絶えがちであったから、源氏には忍びの通い所があるのではないかと左大臣家をやきもきさせたものの、しかし彼は「さしもあだめき目馴れたるうちつけのすきずきしさなどは好ましからぬ御本性にて、まれにはあながちにひき違へ、心づくしなることを御心に思しとどむる癖なむあやにくにて、さるまじき御ふるまひもうちまじりける。」ありふれた色恋ごとなどには、その「本性」として関心があるのではなく、しかし時にはまるで別人のように気苦労な恋路に執心する「癖」があり、そこで不都合な行状も無くはなかったというのである。

玉上琢彌氏「昔物語の構成」[1]に次のごとく説述されていた。「交野少将の目には世もなく、生活もなく、まめだつ

必要もなかった。そのため、なよびかにおかしいこともできたので、光る源氏はこれと違っていつも社会をおもんばかり生活をかえりみていた、というのである。同じく世のすき人ではあっても、光る源氏の君と交野の少将との間には、このように大きなちがいがあった。」このような説述に誘われて、私は「好色人と生活者」という題の小論[2]を書いたことがある。光源氏は生活者でありつつ、また好色人である。この協調しにくく両立しがたいはずの両者は、彼においてどのように統一されることになるのかを考えたのであった。

いったい、「桐壺」巻で帝の第二皇子として生をうけ、余儀なく諸般の事情から臣籍に降った源氏は、物語の進行に従えば、中将（四位相当）、三位中将、宰相中将、大将、そしてあるべき中納言任官の記載はないが、権大納言、内大臣、太政大臣から准太上天皇へと極まっている。そうした歩みが、一世源氏としては現実にありえぬ歴史離れというほかなく、また中途の須磨・明石の流離という悲運もまじるものの、とにもかくにも物語の世界のなかに敷設されている政治の現実のなかで公人としては中枢的存在として無類の栄華への道を歩みつづけるものであったといえよう。「桐壺」巻の高麗の相人によって予告された宿運の開顕していく過程であったが、しかしながらそれは無為に坐していて操り人形が操られるようにおのずから開けていくものではなく、源氏自身としては知恵才覚を動員して状況を読み、出処進退を択びつつ一寸先は闇の世界を切り拓いていく軌跡だったのである。そのような歴とした公人としての在り様を「生活者」と規定するならば、これに背反し逸脱するのが「好色人」としての在り様であろうが、物語の作者は、語り手の口を藉りて「癖」の語を行使することによって相容れぬはずの両者を、光源氏の一身に同居させたのである、と私は前記の小論に述べた。その小論では、具体的に空蟬・夕顔とのかかわり、さらに末摘花や「賢木」巻の諸例――六条御息所の女の斎宮や朧月夜などとのかかわりについて、生活者としての分別とせめぎあい、それをふ

りきって別位相に生きる好色人としての在り様が、まさにそのあやにくな「癖」の発動のしからしめる機微について述べた。たとえば、空蟬とのかかわりは、普通ならば取るに足りない一夜妻とのかりそめの契りとしてすまされたはずであり、その限りでは「生活者」の歩調にとって何程のことでもなかっただろうが、彼自身、面目もなく信じがたい迷路にはまりこんでいったし、夕顔との仲にしても、彼女への全的な耽溺は自身の身分・素姓から離脱し、それを隠蔽することにおいてのみありえたのだし、またその果てに彼女を死に至らしめた事態については、彼がいかに悲嘆のあまり重く患うことになったとしても、その件は表立つことなくどこまでも密々裡に処理しおおせねばならなかったのである。この両者とのかかわりは、ともどもどこまでも「忍びたまひける隠ろへごと」であったが、しかしながら、この隠ろへごととしての経験こそが、「生活者」としてあるまじき行跡であるがゆえに語り手にとって語り継がねばならぬ話柄にほかならなかったのである。末摘花との仲についても同断であろう。私は前記の小論で「この厄介な存在とのかかわりが、物語の世界に敷設された現実の秩序のなかの人生、いいかえれば光源氏の日常性との緊張関係をつくり出し、その日常性を逆に照らし出しつつかれの人生を複雑にあやどるものであることは疑えぬところであった」と述べている。光源氏の「好色人」としての行為は、しかし単に「生活者」としての在り様と緊張的にかかわるにとどまらず、その日常を無類異数なものとして増幅させることにもなったといえよう。

非難すべき「癖」

前記の小論では、「賢木」巻における数多の女性たちとのかかわりについても一瞥したが、たとえば六条御息所の女の斎宮がのちに中宮となって時めくことになったのは、一に光源氏の深慮遠謀による支援・画策あってのことだ

が、同時にこの人の存在が光源氏の権勢を保証することにもなった。その意味で、彼女は「生活者」としての彼の在り様に大きく寄与するものであったといえようが、しかしながら彼と彼女とのそもそもの関係は、禁忌を無化する「癖」の発動を糸口とするのであった。斎宮群行の当日、源氏は愛人の娘であり、神に仕える聖なる身の彼女に恋の対象としての女性を意識し、妖しく心を騒がせていた。「かうやうに、例に違へるわづらはしさに、必ず心かかる御癖にて、いとよう見たてまつりつべかりし、いはけなき御ほどを、見ずなりぬるこそねたけれ、世の中定めなければ、対面するやうもありなむかし、など思す」。まさに不埒な情動というべきであった。六年後に帰洛した斎宮を、源氏は自分が後見となって冷泉帝のもとに入内させたが、いまその詳細については立入らないけれども、それも道にはずれた執念き「好色人」としての彼によって選択された処置であったといえよう。

源氏の人生は「生活者」としてよりも、彼自身制御することもならぬ「好色人」として「生活者」から逸脱し、逸脱するとはいえ、そのことが「生活者」の規矩とせめぎあい、あらずもがなの苦しみを抱え込むことに真骨頂があり、やがては禁忌をも無化しさえする情熱の軌跡が、却って彼の生活体系の拡充されていくものとして物語の世界は開展していくのであったが、さて、ここでことさらに念押ししておきたいのが、光源氏を「好色人」に駆り立てる、その「癖」についてである。いったい彼の「癖」の語感は単にニュートラルな習癖、慣らわしといったものではなく、まともな公人たろうとする「本性」からすればまことに始末のわるい、非難に値する非行といった意味あいを揺曳しているといえよう。「癖々し」、「癖ごと」などの語からしてもそのことは納得されるだろう。光源氏の「好色人」としての行為は、もしそれが「生活者」としての在り様にとって何ら影響するものではない一時のかりそめのものならともかく、けっして自他ともに許容されがたく、「生活者」であることを揺さぶり脅す逸脱として語られてい

るのである。源氏は人知れぬ懊悩をさまざまの場合場合に応じて抱きかかえることになるのであった。あらためて前引の玉上氏の文言を反芻したい。その文言の前に氏はこうも述べておられた。「交野少将は、物語の世界だけに生きる人、恋愛だけしている人、現実の生活からは遊離し、物語のために抽象化された人だったのである」と。そのような交野少将によって笑われる光源氏は、少将と違って現実の生活が第一であるがゆえに「好色人」たることは指弾されねばならない。じつは指弾され否定的に捉えられることによって、その「好色人」としての行為が物語の世界のなかの既成事実として、「生活者」であることと共存することになるのだといえよう。もっとも交野少将とて、まるきり玉上氏の述べられるような人物像であるかどうか、いまはその全体像を知るよしもないが、『落窪物語』のなかで話題にのぼせられる限りでは桁はずれの「好色人」であったがゆえに貴種の筋ながら「身いたづらになりたるやうなるぞかし」とあり、まったく現実性の捨象された抽象的人物とはいいきれなかろう。のみならず、この交野少将の人間像が光源氏によって一面継承されていることの否定しがたい点については前記小論であらあら触れたが、さて、これまで長々と旧稿をなぞるようにして述べてきたのは、当面の『伊勢物語』について同様の視点を構えようがための前作業にほかならないのである。

「いちはやきみやび」

『伊勢物語』初段の「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」という文言をどう読み取るべきなのか、私は長い間釈然としなかった。ここにいう「いちはやきみやび」とはどういうことなのか。いうまでもなくこの初段に語られている主人公（以下「昔男」と称す）の行為についての語り手の評言であるが、これについて諸説を総覧し、とく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に清水文雄氏によって書かれた「いちはやきみやび」という論文[3]に導かれつつ、かつて小論を発表した[4]。要するに昔男が奈良の京春日の里で出会った美しい姉妹に惑乱し、恋着し、その強烈な「すきごころ」の発動を、それ自体の要求として、伝統的な約定に従って組みあげられる秩序あることば、すなわち和歌の表現に転位する、そのことが相手から、それあってはじめて可能な連帯を取りつけることになる、その機微について論じたのだが、さらにそうした行為の主体は、彼が皇親家の血筋の人であることをその資格とするものである点に言及した。より具体的にいえば、藤原氏専制の強化され固成されていく時勢のなかで政権から排除される運勢を余儀なく甘受することとさしかえに誇り高く、純正な文化の伝統の担い手としての在り様を生きる皇統の貴種こそが「みやび」の主人公でありうることをも述べたのであった。

しかしながら、そのような私の目にたまたま触れたのが永田義直著『伊勢物語新講』（昭7）[5]に述べられている解釈であった。永田氏は「いちはやきみやび」を「こざかしき風流といふことの意」とし、「今の世の中にこんな所謂『いちはやきみやび』などをしたならば、早速ブラック・リストにのせられて警戒せられて了ふ」と述べている。「いちはやし」をこざかしいなどの意に解するのはもとより従えないが、にもかかわらず右の見解を読み過ごせなかったのは、「いちはやきみやび」が必ずしも全的に称揚されてはいないからである。いかにも、前記光源氏の好色心の発動が、「癖」として貶されていた、それと同じように「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」には常軌を踏み越えた行為として、非難というほどではないとしても困ったものよとはらはらするような語り手の面持ちが読み取れないだろうか。今の人にはとてもこのようなまねのできるわけがない、が含意されているが、それは「昔」にてらして「今」を貶しているのだと一概にはいえなかろう。このようなとんでもない男が昔はいたのだ、とその逸脱に匙を投

げているといった感触を私は払いのけることができないのである。

いったい、この昔男が「うひかうぶりして、奈良の京、春日の里」に赴いたということは何を意味するのだろうか。「うひかうぶりして」が元服か叙爵か古来説の分れるところであり、「かうぶりす」の用例からして現在は前者とするのが定説である。かつて発表した前記小論では叙爵と解して、彼が平安京の官僚体制に組み込まれて生きる人生の一歩を踏み出した、と解した。そのような已れの在り様に背反して、平安新京建設の過程に棄捨され、しかも彼が擬せられる在原業平の父の無慙な事跡と分かちがたい「ふるさと」へと向っていったということの重い意味を読もうとしたのだが、そのことは「うひかうぶりす」が叙爵ではなくて元服であっても、さして変るものではありえまい。やがて平安京の官人として身を立てることになるだろう若人が、元服するや否や右のような「ふるさと」へ誘引されていく。そこでは彼の全身を揺さぶる美女姉妹との出会いがあり、歌によって彼女たちとの連帯が果たされる。そうした経験が、平安京の生活から自らを蹴り出す行為に始発するのだが、その点、前記の光源氏の場合の「生活者」としての「本性」にもとづく価値表からはずれる「癖」に発する逸脱と同様であるといえよう。容認されがたく支持しがたいというほかないが、じつは容認し支持しえぬ越境であることが、この「好色人」としての行為に、重畳する現実のくびきとの緊張関係を、従って現実感を保証することになるのだといえよう。昔男の本領はまさにそこにあるのではなかろうか。私はかつて光源氏が宮廷政治の場に釘付けされ、現実の掟てに縄縛された主人公であるのに対して、昔男のほうは脱世間的脱政治的に明快であると述べたが、[6] 彼の明快さは、玉上氏が交野少将について、その当否は別にして前記のよう「物語の世界だけに生きる人、恋愛だけしている人、現実の生活からは遊離し、物語のために抽象化された人」と評された「好色人」とはやはり別個であるといえよう。昔男の姿は、そこから背反し離脱しよう

とする現実に囲繞されており、その現実の側からすれば彼の行為はけっしてまともなものではありえないのである。

東下りの逸脱

第九段の有名な東下りの物語にしても、昔男の旅立ちは「生活者」としては度しがたいというほかはない。「身を要なきものに思ひなして、京にはあらじ、……」、京の空の下に己れの居すわるべき坐席はないのだと自分に言い聞かせて、ということは己れを平安京の官僚組織に組み入れられて生きる良吏ではとうていありえぬと決めて、その版図の果ての東国へと自らを追い立てるのだが、そこに反体制の気概を読むべきなのか、それとも偏屈な無用者の空元気を見てとるべきなのか、いずれにしても、まともな「生活者」の在り様に反するものだが、さて出発してみるとたちまちに混迷におちいることを余儀なくされるのである。同行の友も同類であろうが、「道知れる人もなくて、まどひ行きけり」。いうまでもなく道中不案内のために迷ったというのではない。「まどふ」は「まよふ」が「複数の選択肢から一つを選択する決断がつかないことを表わす」のに対して、「明確な選択肢がなく、どうしてよいのか判断がつかないことを表わす。(7)」昔男たちは毅然と誇り高く目標の東国へ向って直行しているのではなかったのである。三河国八橋における「唐衣」の折句の歌に京の妻への思いをうちこめ、駿河国の宇津山越えのわびしさに、たまたま行き合った知人に妻への文を託し、富士の山容に向っては京の比叡の山と大きさが比較された。武蔵国の果ての隅田川のほとりでは、望郷の思いに堪えかねては水上に遊ぶ都鳥に「言問はむ」とうたう。もちろん要は和歌のうたいあげにあるだろう。同行人たちは昔男の歌に感じ入ることによって心情の共同体をつくることになり、そこにこの物語の眼目があるのだとはいえ、しかしその歌は、「京」を離れていけば離れていくほどに反比例的につのる「京」への思

いから要求されるものにほかならない。もっとも、その「京」は幻視的に希求される観念の「京」であるに違いないけれども、それは現実の「京」との截然たる訣別あってのことではないのである。当初「京にはあらじ、あづまの方へ……」とはあるものの、心は正反対の方向に強化されていったことになる。このような昔男の東下りを、語り手は全幅共鳴し支持し称賛しつつ語り進めているのだろうか。そうではなくて、世間の常識では律しきれない、いわば虚け者の度しがたさにお手あげだ、困ったものよ、さればこそこの行状を語らずにはすまされまいといった機微ではないのだろうか。

昔男の東下りの語られる第九段が現在のような形に定まるまでには数次の増益の過程があり、それはまた前後する東国章段の引き寄せられる過程でもあった。第七段がやはり「京にありわびて、あづまに行きけるに……」、第八段がこれまた「京や住み憂かりけむ、あづまの方に行きて住み所求むとて、友とする人ひとりふたりして……」とあり、第九段と類同に語り起こされている。第十段から第十五段までは、必ずしも整序されていないものの武蔵国から陸奥国へと話は続いていくが、そこでは伝誦された歌々を核としつつ昔男の流離譚の趣向が仕組まれているということであろう。

さて第十段の末尾の一文が注意される。この段は武蔵国に到り着いた男がその国の女に言い寄った話である。女の父は素姓もありきたりの男で、この縁組には不賛成であったが、藤原氏の血筋の母親は、都から入来したこのあて人を歓迎したという。「三芳野の……」の歌が男のもとに寄せられ、それに対して男が「わが方に……」の歌を返した。呼吸の合ったこの贈報は『古今六帖』第六と『続後拾遺集』恋三にともども収められているが、この話の結びの「人の国にても、なほかかることなむやまざりける」という文言は、彼の行為を称揚しているとはとうてい考えられま

い。「やまざりける」には「やむ」ことが正常に復することであるのに、相変らずで困ったものよ、といった感じである。このような遠国にやって来てまで、この男の無軌道は改まらないのだと慨嘆する気配である。じつはこうした逸脱あってこそ世俗とは別次元に「みやび」を生きる主人公たりえたのではあるが。

「昔の若人」「今の翁」

さて、初段の「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」に類似する文言が第四十段の末尾のそれである。親がかりの若人がその家の召使い女に思いを寄せるが、身分違いの野合となることを恐れる親が女を放逐しようとした。男は血の涙を流して抗議するが、女は連れ出されてしまう。男は「いでていなば誰か別れの難からむありしにまさる今日はかなしも」と詠んで、息絶えた。入相のころに絶え入ったのだったが、狼狽した親の願立てによって、翌日の戌の刻ごろにやっと息を吹き返したというのである。「昔の若人は、さる好ける物思ひをなむしける。今の翁、まさにしなむや」と語り添えられているのだが、この文言を現代語に訳してみたところではじまらないであろう。竹岡正夫『伊勢物語全注釈』に近現代の十種の解釈説が列挙されているが、まさに諸説紛々の体というべきである。私はかつて堀内秀晃氏との共著として刊行した評釈書[8]において次のように述べている。「物語作者が子の立場に同情的であるのは、子の思いつめた純粋さに共鳴しているからである。そうした純粋さをこよなく愛する気持ちは、その純粋さを保ち得た人への限りない郷愁の思いとなると同時に、あまりにも打算に流れる現在の世相への痛烈な皮肉ともなって表明されている。『今の翁まさに死なむや』――若いくせに大勢に順応し埋没することに汲々として青春性を喪失してしまった若者たち。ちょうど第一段の終わりにあったような批評意識が、より明確な形で、ここには出ている

のである」と。このような読みを全面的に撤回しようというのではないけれども、いささか視点をずらしておきたいのである。「第一段の終わりにあったような批評意識」についてさきに述べた私見と同じ視点から、この結びの文言を読みなおせるのではなかろうか。無垢純粋の恋のためには死に入る一途の情熱への讃歌というよりは、常識の尺度ではおしはかりがたい珍事としてこれは語られているという一面を否定しがたかろう。「まさにしなんや」(前引の文章では「し」を「死」と解したが「為」が穏当か)は、どうしてそんなことができようぞ、とてもそんなまねのできるはずがない、の語調であるが、それが「今の翁」だからというよりも「昔の若人」であっても、異例中の異例、奇談なればこそ語りおさめたということなのだろう。

これは一般論であるが、いったい物語の主人公が主人公でありうるゆえんは、彼が凡常の人間と等身大ではなく、常軌からはずれて人々の意表をつく存在であることを第一義とするのだといえよう。だからこそ語り手は語り伝えようとするし、また聞き手は聞耳を立てざるをえないのである。そのことによって日常性から離陸して別世界に心を遊ばせたいのであるが、なおそうした物語の主人公が人々の支持・共感を取りつけることのできるのがとくに和歌であるといえよう。まさに和歌の徳こそが『伊勢物語』の本領であることはいまさらいうまでもあるまい。『伊勢物語』を「同化の文学」と規定した三谷邦明氏によれば、作中の和歌を「享受者自体があたかも自分が詠んでいるかのごとき錯覚で了解するのであって、この物語にあっては和歌が核であって、物語はその和歌によって喚起されたものだと言える」し、またこうした享受の方法は『伊勢物語』のさまざまの特色を形成し「この物語は、他の歌人の和歌(万葉伝誦歌をはじめ読人しらず歌や業平とは別の歌人の歌——稿者注)であっても、作者=読者が同化・一体化して、自分自身がその歌を詠むという、特定の名称を持った人物であることを否定する文学なのであって、他者の歌の利用という

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com